

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 7月12日 11:05 AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 35,000~42,500 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 32,000~41,000 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500~18,700

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000~162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578~108.350

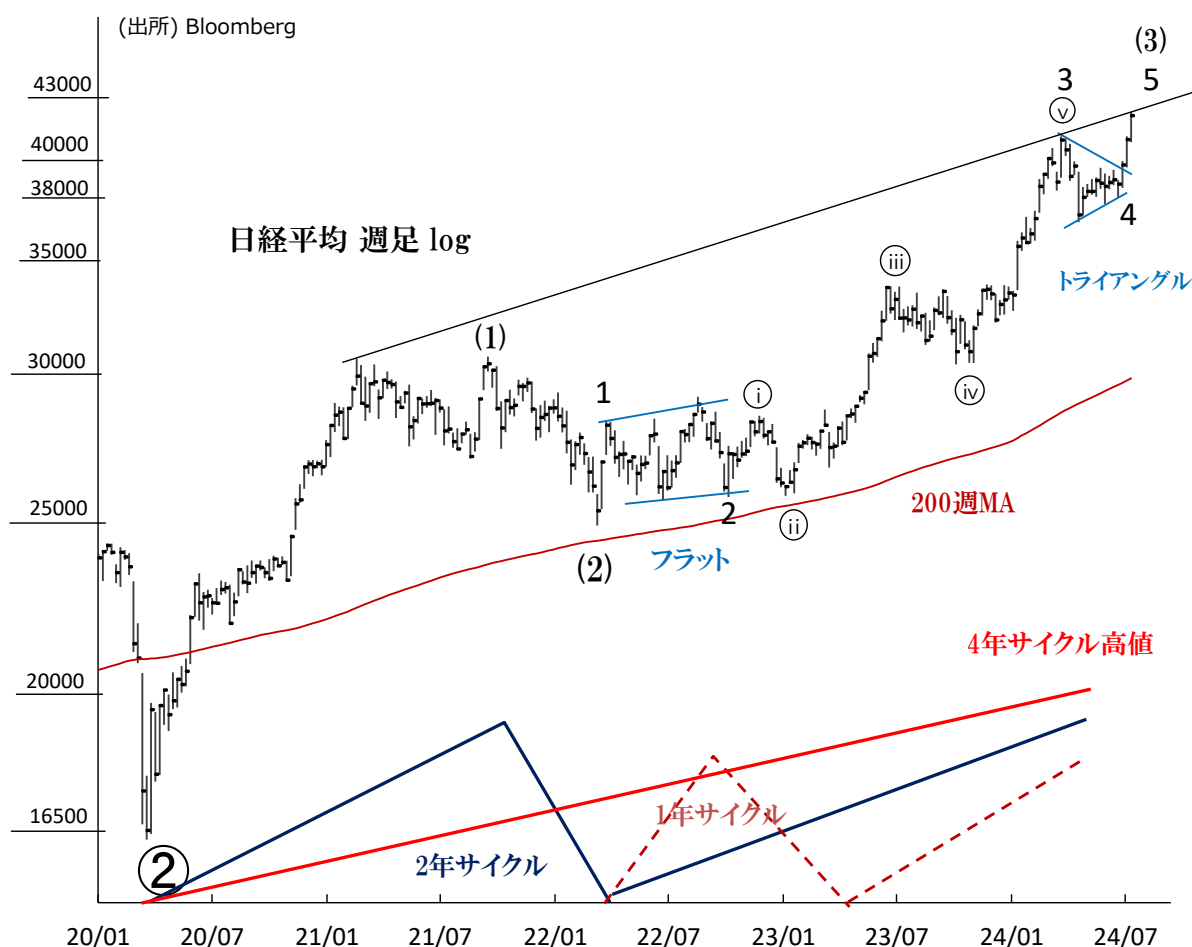
エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。



【週足・エリオット波動分析】

今年 3 月高値(41,087 円)からの調整第 4 波は[トライアングル]となり、それは第 2 波(22 年 3 月～6 月)の[フラット]と交互(オルタネーション)になっていました。

6 月下旬から足元にかけての上昇は、22 年 3 月安値(24,681 円)を起点とするインターミディエイト級第(3)波における、マイナー級第 5 波に位置付けられます。

マイナー級の第 1 波は 3657 円幅、同第 3 波は 15466 円幅、各々上昇しています。第 3 波の長さは第 1 波に対し 4.229 倍(≒4.236)と大きく、それは延長(エクステンション)した波です。

したがって現行の第 5 波は延長せず—1・3・5 波で延長するのはひとつだけ—その長さは第 1 波と同程度と考えられます。

7 月 11 日、第 1 波と第 5 波が等しく上がる水準[41,607 円]を上回りました。これにより、次は第 1 波と第 5 波が 1:236 を反映する水準[42,470 円]に焦点が移りますが、この日の高値(42,426 円)はそれに近いものでした。

またこの日、TOPIX 終値は 2929 となり(ザラバ高値は 2946)、第 1 波と第 5 波が等しく上がる水準[2931]を達成しています。

ちなみに、トライアングルに続いて起こる上昇(第 5 波)の特徴のひとつに、「とても強いが短期間で終了する」というものがあります。

③波-(3)波「サード・オブ・サード」は 7 月～8 月にも終了すると思われます。その後には③波-(4)波の調整が到来、おそらく 9～11 月に 4 年サイクル底を付けることでしょう。



【日経平均 日足・エリオット波動分析】

37,950 円(6/17 安値)以来の上昇は、マイナー級第 5 波とカウントされます。

7 月 11 日、日経平均はマドを空けて上昇しました。

ここから早々にマド埋め(41,889 円)をはたすようなら、それは上昇トレンド中最後の”exhaustion gap”だった証左であり、日経平均の基調転換が示唆されます。



NYダウ



【NYダウ日足・エリオット波動分析】

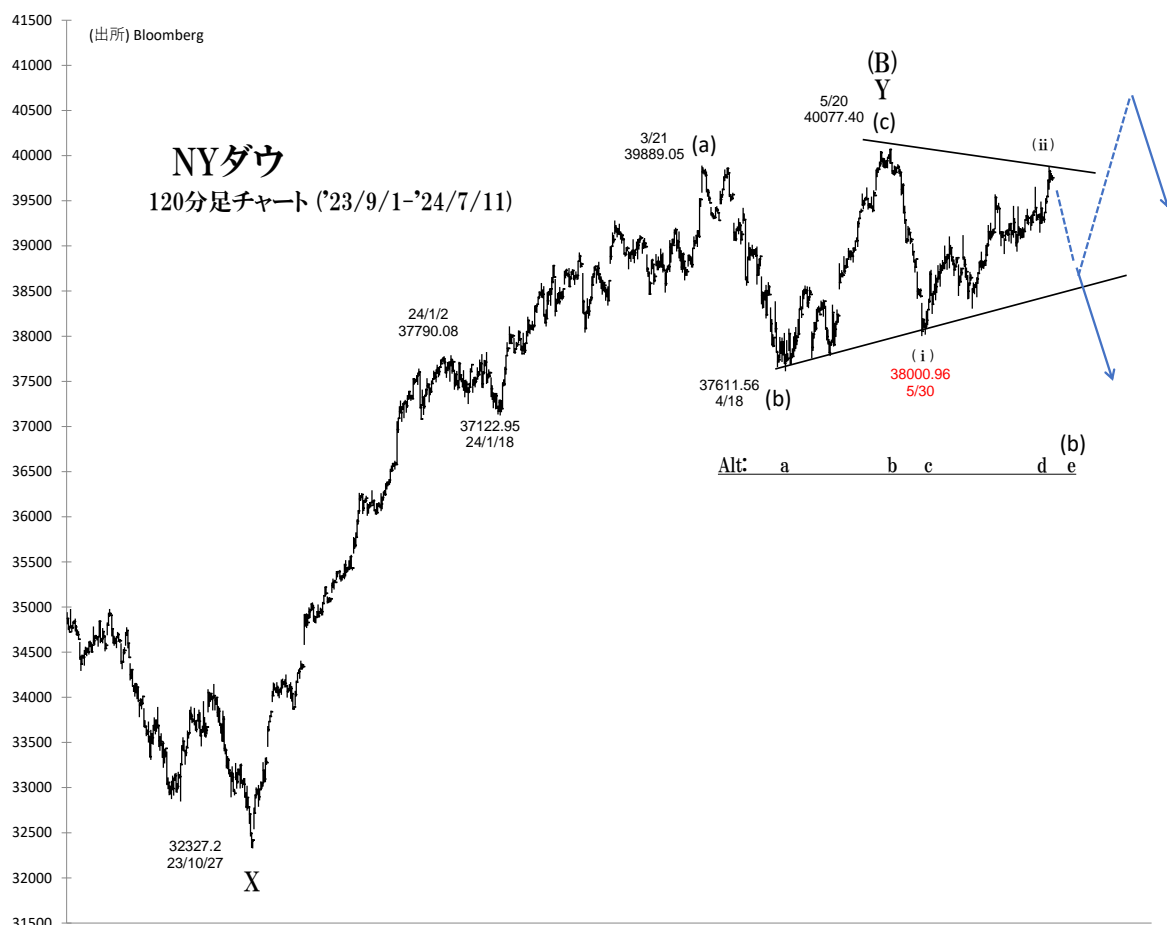
NYダウは22年1月高値(36,952ドル)以来、プライマリー級④波展開中とみられます。22年10月からの上昇は④波における(B)波であり、それは「不規則天井(イレギュラー・トップ)」です。(B)波の後に続く(C)波の下落スケールは、(A)波の下落(22年1月～22年10月)に匹敵するか、あるいは、より大きなものになるでしょう。

22年10月安値(28,660ドル)を起点とする④波中(B)波の上昇は、ダブル・ジグザグ[W-X-Y]。23年10月安値(32,327ドル)からの上昇はY波ジグザグ[(a)-(b)-(c)]です。

Y波は40,077ドル(5/20高値)で天井を打ち、④-(C)波による下落が始まったかもしれません。この見方は38,000ドル(5/30安値)を下抜くことで強められます。そうすると当面は、200日MA※を目指し下落していく展開が想定されます。

※200日MA…37,394ドル(7/11)

もう一つの波動解釈は、Y波の(b)波が[トライアングル]を形成中であり、「最後の上昇」(c)波によって高値更新がある、というものです。



【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

40,077ドル(5/20 高値)から 38,000ドル(5/30 安値)までは第(i)波による下落、そこから第(ii)波によるリバウンドと位置付けられます。

7月11日、一時 39,875ドルと4万ドルに接近しましたが、38,000ドルから足元までにみられる choppy な上昇波形は、修正波としての特徴を示しています。第(ii)波リバウンドは終わったか、終わりつつあるとみられます。

38,000ドルを下抜くと、第(iii)波の下げに入った可能性が高く、短期的にも 37,611ドル(4/18 安値)を試すでしょう。

一方、38,000ドルが維持される限り、3月高値からの(b)波を[トライアングル]と解釈できます。この見方によれば、NY ダウは—大きな調整に入る前の—「最後の上昇」により 40,077ドルを上抜く展開が想定されます。

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

22年12月からの上昇は、プライマリー級第④波における(B)波に位置付けられます(あるいはプライマリー級第⑤波)。(B)波終了後には(C)の下落がスタートしますが、(C)波によりナスダックは12,500~10,000へ下落する可能性があります。

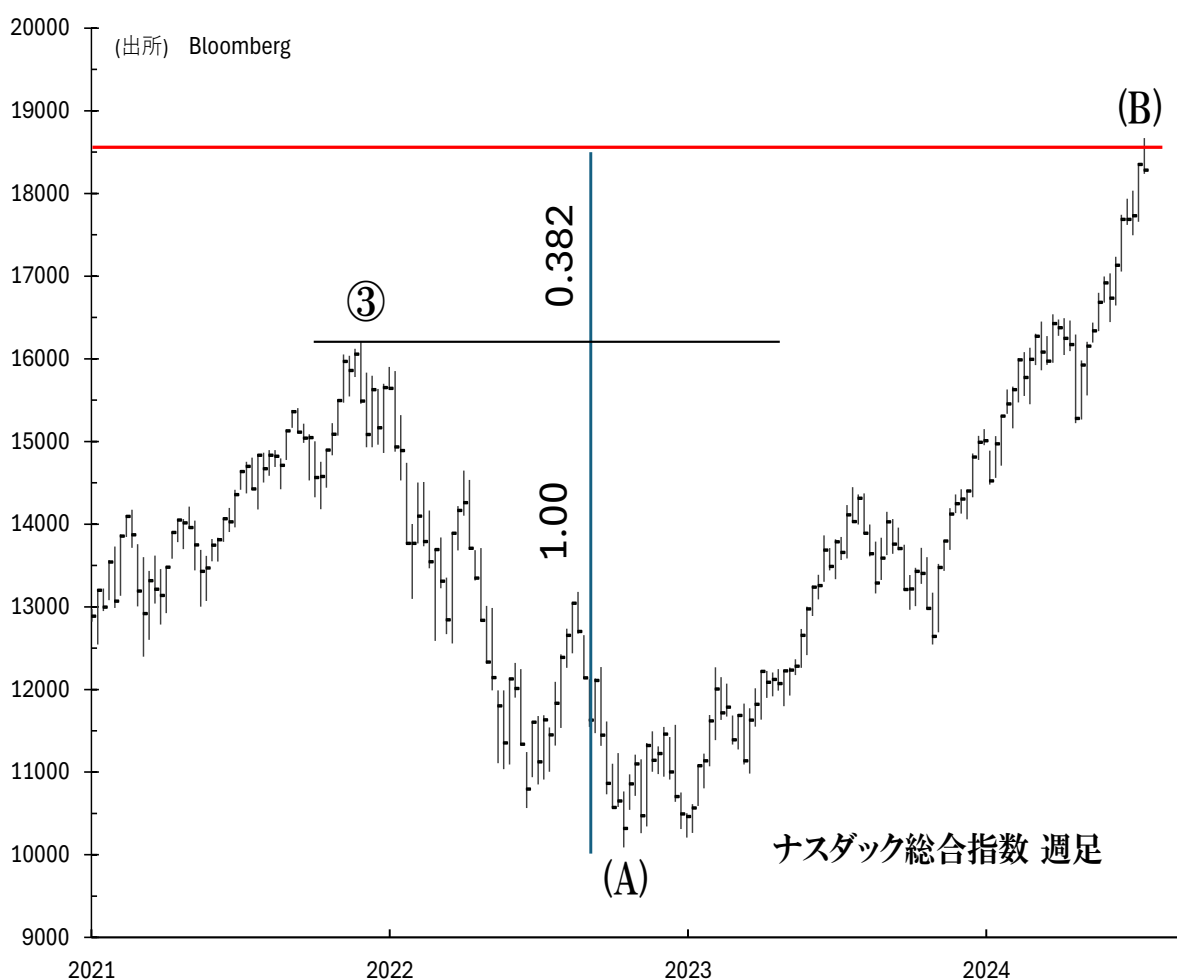
④-(B)波による上昇は[ダブル・ジグザグ(W-X-Y)]編成です。今年4月安値(15,222)からは、Y波(②-③-④)中③波による上昇とみられます。

7月11日には一時18,671まで上昇し、フィボナッチ比率の節目に達しました。

[18,551] ④-(B)波の上昇幅が、④-(A)波(21年11月~22年1月)による下落幅に対し1.382倍になる

加えて、この日のローソク足「包み大陰線」は、ナスダックのピークアウトを暗示しています。

短期的に7月3日-5日のギャップ(18,188-18,197)が埋められると、それは下落トレンド入りの追加的シグナル発動となります。



【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・長期エリオット波動分析】

今回は**長期タームの波動カウント**をご紹介します。

[基本シナリオ(プリファード・カウント)]

SOX 指数は、08 年 11 月安値(167)以来の第③波による上昇を 22 年 1 月高値(4068)で完了し、そこからは第④波の調整が展開している、とみています。

これまで書いてきたように、この第④波は[エクspanディット・フラット]か[ランニング・フラット]を形成するとみられ、22 年 10 月安値(2089)からは(B)波の上昇に位置付けられます。

(B)波が終わった後には(C)波による下落トレンドが続きます。

それは④-(A)波(22 年 1 月~22 年 10 月)の下落率(48.63%安)に匹敵するか、あるいはそれを超えるスケールでの下落が見込まれます。

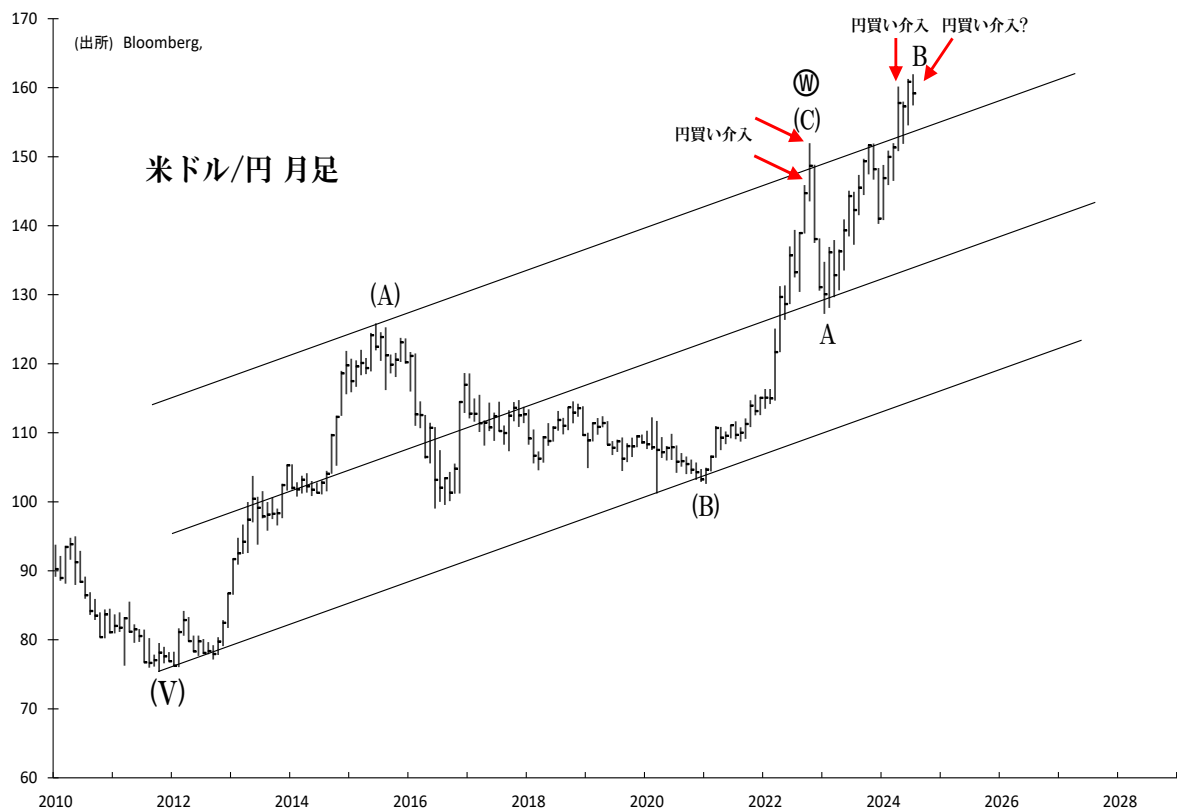
[代替シナリオ(オルタナティブ・カウント)]

上記の基本観に代わる見方として「22 年 10 月安値から足元までの上昇は既に第⑤波である」をあげられます。このケースだと、第⑤波完成後の調整は(基本観に比べ)より深く、より長期にわたるものになるでしょう。

(出所) Bloomberg



米ドル/円



2011年10月の75.570円以来の(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安[Ⓜ]波は、151.899円(22/10/21)を以て終わり、そこから2028年頃までレンジ相場を形成していく、というのが筆者による米ドル/円(ドル/円)の基本観です。

【月足・エリオット波動分析】

ドル/円8年サイクル高値は161.938円(7/3)を以て終わったか、終わりつつある、とみています。

いまメディアやSNSを通じて「円買い介入でも円安は止められない」「1ドル=200円説」などという極端なフレーズが飛び交い、「円安は構造的なもの」と永久に円安が続くかのようにいわれていますが、結局のところ相場は循環論であり、誰もが納得しやすい相場の理屈や構造論が持ち込まれたとき、その相場は大抵終わりに近いものです。今回でいえば円安の終わりが近い、ということです。

現在の月足は、長期上昇チャネルの上側から大きく逸脱していますが—今月のチャネル上限は153.750円に位置します—このように「極端に上がり過ぎ」の状態は長続きせず、いずれチャネル内に回帰する公算が大きいと思われます。

なお7月11日の日本時間21時半に米CPI(予想を下回る結果)が発表されると、円相場は円高に大きく振れました(政府・日銀による円買い介入観測が浮上しています)。「円安パニック」「円安バブル」が収束する、最初のきっかけかもしれません。



【週足・エリオット波動分析】

22年10月(151.899円)からのA(↘)-B(↗)-C(↘)編成において、23年1月(127.158円)からはB波に位置付けられ、それは151.899円を超えて不規則天井(イレギュラー・トップ)を形成しています。

A波の長さに対し、B波の長さが1.382倍になるとした場合(これはノーマルな考え方です)、B波トップの目標値は161.350円です。この目標値は既に達成されており、B波はいつトップアウトしておかしくありません。

なおB波の後に続くC波(ドル安・円高)の長さについては、A波が有効な「ものさし」になります。

A波の長さは24.741円(およそ25円)でした。ここから、C波の長さの標準は25円程度と思われます。

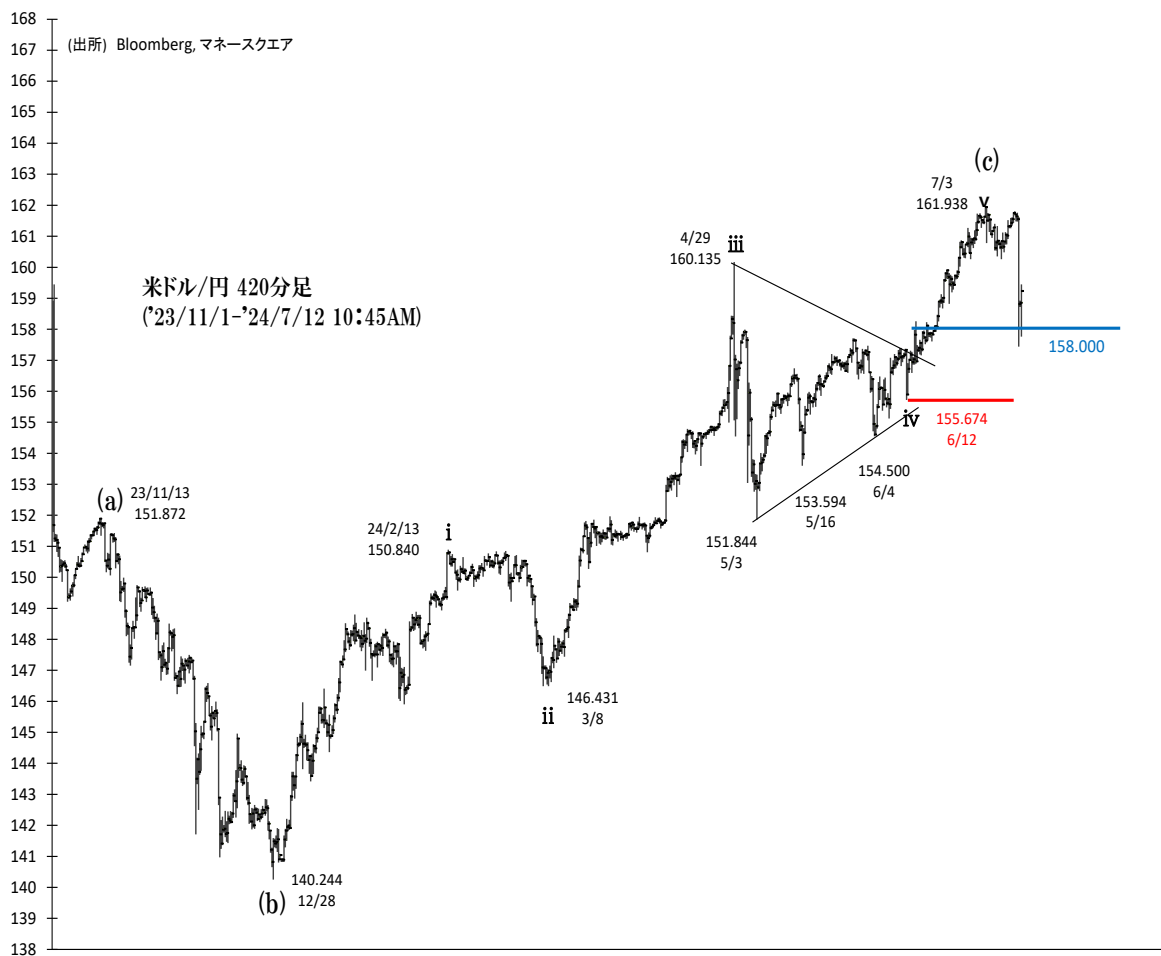


【日足・エリオット波動分析】

4月に入ってからの急激なドル/円上昇(152円⇒161円)は、日米実質金利差を反映しておらず、専ら投機によってもたらされました。『円安バブル』と呼べる過剰な円安は、今後はあるべき水準へ修正されていくと思われます。

[日米実質金利差による推計値]・・・147.454円

筆者は、米長期金利の大幅な低下⇨大幅な米ドル安を見込んでおり、そうなれば日米実質金利差の縮小に沿ってドル/円は150円を下回っていくでしょう。



【時間足・エリオット波動分析】

昨年末の 140.244 円からのドル高・円安は、161.938 円(7/3)までに 5 つの波動がすべて出揃いました。円安から円高へ、トレンドは転換したかもしれません。

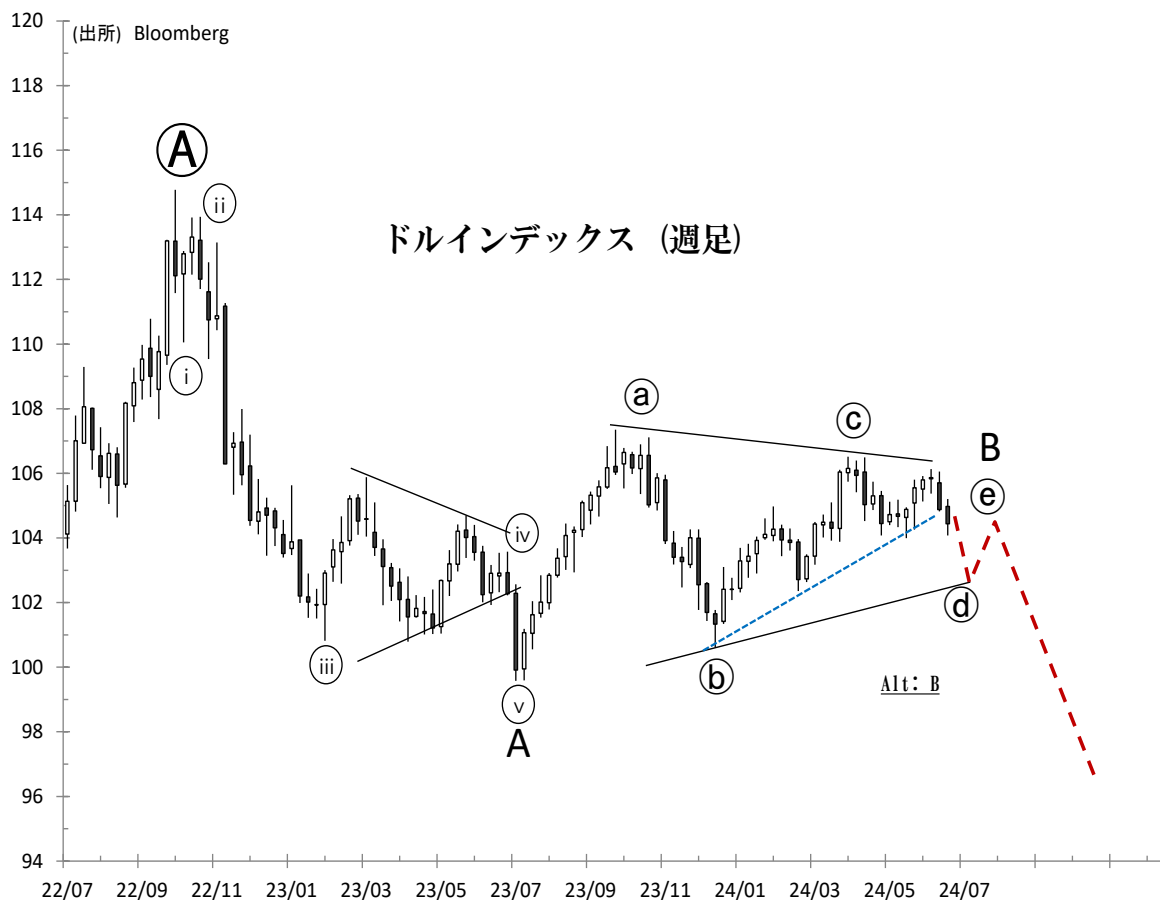
7 月 11 日には一時 157 円前半へドル/円は下げました。もっとも、今のところは節目の 158 円を明確に下抜いた、とはいえません、

[158.066 円]…第 v 波の 61.8%押し水準

12 日以降、NY 市場終値ベースで 158 円を下回ったことが確認されれば、それは円安から円高へのトレンド転換の証左と考えられます。



ドルインデックス (ドル指数)



【週足・エリオット波動分析】

22年9月高値(114.778)以来、ドルインデックスはA(↘)-B(↗)-C(↘)編成による下落基調にあります。23年7月安値(99.578)を起点とするB波は、トライアングル(a)-(b)-(c)-(d)-(e)を形成中であり、足元は⑤波のドル安局面が進行中です。

おそらく、まもなくB波は完成し、その後に到来するC波によって、ドル指数は23年安値(99.578)を大きく下回るでしょう。

派生的な見方として、「トライアングルは105.915(6/21)を以て既に完成しており、そこからはC波によるドル安が始まっている」というものがあります。

いずれにしても、**ここからは大幅なドル安を想定**しています。

ただし106.517(4/16)を上抜く動きとなったときは、短期的なドル安見通しはいったん撤回され、別のオプションが必要になります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
